

## ヤクサービーの『国々』とその価値をめぐって

竹 田 新

## はじめに

筆者は過去に、Ibn Khurdādhbih（以下、IKhrと略記。272 AH/885年以後没）によって著されアラビア語地理書の嚆矢と言われる *K. al-Masālik wa-l-Mamālik* と、al-Muqaddasī（以下、Mqdと略記。391 AH/1000年頃没）が著したイスラーム圏地誌の最高傑作 *K. Aḥsan at-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālim* について調べたことがある<sup>1)</sup>。しかるに、両作品の間を繋ぐ重要な役割を果たしたと考えられるヤクサービー al-Ya'qūbī (292 AH/905年以後没) の『国々』 *K. al-Buldān* についてはこれまでいわばなおざりにしてきた感がある<sup>2)</sup>。そこで今回、『歴史』 *Ta'rikh* などの著者としての方が有名な彼のこの地理書について多少調べてみた。ヤクサービーの『国々』に焦点を当てた研究書・論文は、管見では極めて少数で、彼の『歴史』と共に『国々』を全般的に扱った al-Ja'fari [1980] のほか、『国々』中のベルベルに関する記述を分析した Marçais [1941]、『国々』の記述方法を考察した Sturm [1994] などが挙がるくらいである<sup>3)</sup>。本研究ノートでは、ヤクサービーのこの地理書の内容に触れた後、この書の価値について、まず前後のアラビア語地理書との比較、次いでいわゆる近現代以前のアラビア語作品中に見られる引用・利用、そして近現代における研究資料としての利用という、三つの観点から考えてみる。

## I

ヤクサービーが 276 AH/889年か 278 AH/891年に書き上げた<sup>4)</sup>『国々』には現在、607

1) 前者は竹田 1979, 後者は竹田 1984, 1997。

2) この『国々』のデータベース化を利用した、建設当初のバグダードの地図を作成する試みに言及したことはある [竹田 1989]。

3) al-Ja'fari 1980より簡単なものに al-Ash'ab 1988があり、Wiet 1937や Al-Farrā 1981も『国々』に関する解説が詳しい。なお、al-Farrā 1984? (1981の博士論文の利用・応用)は未見である。そのほか、この『国々』にある程度言及した研究書・論文は、(V)で後述するものなど多数ある。

4) ヤクサービー（以下、Ybと略記）は「Surra Man Ra'āは、建設され居住されて以来、我らがこの本を書いた時点まで、55年である」[YbB: 268]と言っている。

AH/1211年の‘Alī b. Abī Muḥammad b. ‘Alī al-Kindī al-Inmāṭīの手になる写本に基づいた公刊テキストが5点ある。すなわち、本稿で用いる de Goeje による校訂本 [1892。以下、YbB と表記] や、その基になった Juynboll 版 [1861]、いずれも de Goeje 版の焼き直しである Najaf 版 2 種 [1939, 1952] と Beirut 版 [1988] である。また、半公刊テキストとしては、Al-Farrā が上記の刊本と Exeter 大学図書館所蔵の 2 写本とを突き合わせて多少の細かな修正を加えたもの [1981] がある。

いずれの版も不完全なものであるが、この書の記述方法〔若い頃から旅をして、各地の人への質問で集めた情報のうち信頼の置けるものを書き留めた〕や、記述内容〔諸地方・都市名、住民名、各地間の距離、征服した将軍名とその時期、租税高、平地・山地などの地形、気候、水について述べた〕に言及する序文 [YbB: 232–33] に続き、本論の前半は第 1 部が「この世の中央で大地の臍」al-‘Irāq (下メソポタミア) の「中央」Baghdād について、その faḍā’il (長所) と前史に続き、① al-Manṣūr および② al-Mahdī の命による建設の全貌いわば khiṭaṭ (街の見取り、設計・配置図) [al-Madīnah と呼ばれる円城内について、中央の黄金門宮・モスクや、4 門・諸 sikkah (通り) など、次いで al-Madīnah の外の諸 rabaḍ (城外) からなる 4 部分について、諸 qaṭī‘ah (授与地)・darb (sikkah より広い? 通り)・市場・モスク・石橋・水路など <以上①>、更に Dijlah (ティグリス川) 東岸部の諸 qaṭī‘ah や 5 道路など <②>] を描写する [YbB: 233–55]。第 2 部は「Hāshim 家のカリフたちの第 2 都市」Surra Man Ra‘ā (サーマッラー) について、al-Mu‘taṣim による建設までの経緯と建設の全貌〔諸地区の諸 qaṭī‘ah と、7 shāri‘ (大通り) の諸 qaṭī‘ah・市場・モスク・宮殿などと水路] に al-Wāthiq 以降の街の変容 [al-Mutawakkil による al-Ja‘farīyah の建設など] やカリフたちの状況を記述する [YbB: 255–68]。

本論の後半は、国々を Baghdād から「東方と西方と南の風上 (南方) ……と北の風上 (北方)」の 4 部に分け [YbB: 268]、第 1 部は「東方部分」、実際には東北部について、Baghdād から al-Jabal (i. e. al-Jibāl, メディア) の as-Sirawān を通って、aṣ-Ṣaymarah, Ḥulwān, ad-Dinawar, Qazwīn と Zanjān, Ādharbayjān, Hamadhān, Nihāwand, al-Karaj, Qumm とその属地, Iṣbahān, ar-Rayy, Qūmis, Ṭabaristān, Jurjān (グルガーン), Ṭūs と Khwārazm (ホラズム), Naysābūr (ニーシャープール) と Sarakhs, Marw (メルヴ) と Āmul や Harāt (ヘラート), Būshanj (ブーシャング), Bādaghīs, Sijistān, Kirmān と Makrān, aṭ-Ṭālaqān と al-Fāriyāb, al-Jūzajān (グズガーン), Balkh と al-Bāmiyān など, Marwarūd (Marw ar-Rūdh) や at-Tirmidh と aṣ-Ṣaghāniyān, al-Khuttal と上 Tukhāristān や Firabr, Bukhārā, aṣ-Ṣughd, Samarqand と Ustrūshanah, Farghānah, Ishtākhanj (Ishtikhān), ash-Shāsh (タシュケント) と Isbīshāb (Isfijāb) などへと至る道程およびこれらの地方と都市との概要〔景観・征服事情・住民構成・飲料水源・産物などの一部〕に、Turkistān の諸種族の状況、カリフ ‘Uthmān 時代以降の Sijistān と Khurāsān との総督史を記述し、以上のうちの主要各所の租税高を付記する [YbB: 269–

308]。第2部は「al-qiblī (南) 部分」、実際には西南部であり、Baghdād から al-Kūfah, al-Madīnah (メディナ), Makkah, al-Yaman (イエメン) のṢan‘ā’までの道程と、途中の諸所の景観・住民構成などに al-Kūfah の khiṭaṭ, al-Madīnah の諸水資源, Makkah の諸山・隘路・属地や al-Mahdī による拡張後の聖モスクの大きさ, al-Yaman の諸 mikhlāf (地方, 地区)・島・海岸・部族居住地を記述し [YbB: 308–20], 第3部は「al-jarbī (北) 部分」であるが、実際には東南部に当たり、Baghdād から al-Madā’in, Wāsiṭ, al-Baṣrah までの道程および途中の諸都市の概要〔Wāsiṭは khiṭaṭも〕である [YbB: 320–23]。本来の著作には、al-Baṣrah の続き〔khiṭaṭ?〕をはじめ、al-Ubullah, al-Yamāmah, al-Baḥrayn, ‘Umān, 更には Ahwāz (フーゼスターン), Fāris, おそらく as-Sind (インダス川下流域) までへの行程および主要都市の概要に関する記述があったと考えられる<sup>5)</sup>。また、実際の北部である Armīniyah などの記述もその後(この第3部か、次の第4部の冒頭)にあったと推測される<sup>6)</sup>。第4部は「西方部分」で、西北部を指すが、冒頭部分が欠落しており、ar-Rūm (ビザンツ帝国) の兵制, Ḥalab (アレppo) から Ḥimṣ 軍管区の Ḥimṣ, Dimashq (ダマスカス) 軍管区の Dimashq, al-Urdunn (ヨルダン) 軍管区の Ṭabariyah (ティベリアス), Filasṭīn (パレスティナ) 軍管区の ar-Ramlah, Miṣr (エジプト) の al-Fuṣṭāṭ へ至るまでの道程と、これら ash-Sha’m (シリア) の各軍管区の al-Ghūṭah ほか諸地区と Ḥamāt ほか諸都市との住民構成などに各軍管区の征服事情・租税高, Ḥimṣ から Ba‘labakk 経由の Dimashq への駅通路, ash-Sha’m から Filasṭīn を通る Makkah への道, al-Faramā から Uswān まで Miṣr 諸都市の景観・産物など〔al-Fuṣṭāṭは khiṭaṭ, al-Iskandariyah (アレクサンドリア)は諸地区など〕, Wādī al-‘Allāqī ほか諸金鉱や an-Nūbah (ヌビア)・al-Bujah への道程と al-Bujah の習俗, Miṣr の征服事情と歴代の租税高, Miṣr から Aylah を通って Makkah ・al-Madīnah へ至る道, al-Fuṣṭāṭ から al-Maghrib (北西アフリカ) の Barqah, Surt, Waddān, Zawilah, Fazzān, Aṭrābulus (トリポリ), al-Qayrawān, al-Andalus (イベリア半島) の Qurṭubah (コルドバ) ほか諸都市, Tāhart, Sijilmā-sah, as-Sūs al-Aqṣā への道程およびこれらの地方・都市の景観・住民構成や、飲料水源ほかの記述となっている [YbB: 323–60]。

5) この第3部は「Baghdād から al-Madā’in とその近辺の Dijlah 兩岸の諸都市と諸ṭassūj (行政区?), Wāsiṭ, al-Baṣrah, al-Ubullah, al-Yamāmah, al-Baḥrayn, ‘Umān, as-Sind, al-Hind (インド) へ行こうと欲する者は……」[YbB: 320] で始まっている。後述の(IV)も参照。

6) de Goeje [YbB: 320, 1] は、イラク東部, アラビア東部, インドという南部の後に、アルメニアなどの記述が来ると言う。

## II

こうした内容を含むヤクロービーの『国々』の価値やアラビア語地理書におけるこの『国々』の位置を知るため、この書をその前後の地理書と比較してみる。

現在知られているアラビア語地理書で最も古い IKhr の前掲書はヤクロービーのソースの一つ、少なくともヤクロービーに影響を与えたのではないかと考えられる<sup>7)</sup>。ヤクロービーの書と IKhr の書との比較は、Krachkovskiy [1957: 153-54], al-Ja'fari [1980: 242-47], Hopkins [1990: 309-11] などにも言及されているが、両書の類似点または共通する特徴は第1に、al-'Irāq, Baghdād を中心に据え、4方位別に街道に沿った記述を行なう点である。イラン系の IKhr の書に見られるこの特徴はササン朝ペルシアの行政地理書の影響を受けていると考えられる [竹田 1979: 105] のに対して、ヤクロービーの書の少なくとも4方位別記述は、ペルシアの直接的な影響というよりは IKhr の書の影響を受けたか、あるいはヤクロービーの旅行者としての発想、すなわち、旅行する順路を辿って記述していった結果なのではなかろうか<sup>8)</sup>。なお、IKhr と比べると、旅程の記述が簡素であることに加えて、4方位別の分け方も多少異なる<sup>9)</sup>。第2の類似点としては、駅通業務に携わった IKhr と同様、ヤクロービーも官吏であったと考えられ、どちらの書も、租税関係などの公文書を利用して、官吏向けに書かれた行政地理書である点が挙げられる<sup>10)</sup>。

他方、相違点あるいは独自性としては、以下の5点が挙げられる。第1に、IKhr の書はいわばデスクワークの所産であるのに対して、ヤクロービーの書は自らの足で旅をして集めた情報を最重視した作品である。第2に、IKhr は東は aṣ-Ṣin (中国) まで扱っているのに対して、ヤクロービーは自身の旅行した範囲を記述の対象としたため、扱っている地域がほぼイスラーム圏に限定されている。第3に、IKhr はギリシアの見解も 'ajā'ib (奇譚) も取り入れ、まさに異種混淆で、記述も整然としていないと言える。これに対して、ヤクロービーは旅行による自らの観察の重視からも窺えるが、自分で確信したもの、納得したところを記述していく。論理的でなく現実に合わないような物事は拒否し、いわば科学的な記述を

7) Barthold [1930 (1937): 10 (14)] や Krachkovskiy [1957: 150] は Yb が IKhr を利用したと言う。

8) もっとも、Kramers [1954: 150] あるいは Miquel [1967: 288] は Yb にバビロニアあるいはメソポタミアの影響を指摘する。Baghdād に生まれた Yb は東はターヒル朝下の Khurāsān [YbB: 278] から西はルスタム朝下の al-Maghrib [YbB: 358] などまでを訪れている。

9) Ādharbayjān は IKhr では北方に属するが、Yb では東部に扱われ、逆に al-Baṣrah は IKhr では東方、Yb では北部になる。

10) Yb は Aḥmad (b. Abi Ya'qūb) al-Kātib と呼ばれることがあり [KhB: I, 69] [AF: 225-26, 232, etc.] [M: I, 326], 書記 (kātib) を職業としていたと考えられる。Wiet [1937: xiv] は Yb の書を政治地理書と呼ぶ。

心掛け、'ajā'ib を入れないのはもちろん、ギリシアの見解も取捨選択するという方針を貫き通す。第4に、前述したように官吏という同じ読者層を対象としているとは言え、IKhrの書はその大半が街道の行程と、各地方の地名および租税額の列挙といった単調な記述である。これに対して、ヤックビーの書は各地方の地名の後に地誌的記述を加え、国々の全般的な様相が分かるような作品となっており、後述する「諸道と諸国」al-masālik wa-'l-mamālik というジャンルの先駆的な作品である<sup>11)</sup>。最後に、ヤックビーの独自性というか特異性は歴史への偏愛が見られることである。これは彼がまずもって歴史家であったことを考えれば致し方のないことかも知れない。

では、後世の地理書との関係はいかなるものであろうか。紙幅の都合上、比較はこの「諸道と諸国」を発展させた、次世紀のal-Balkhī (以下、Blkhと略記) 学派——Blkhに始まりal-Iṣṭakhri, Ibn Ḥawqal, Mqdと続く——とだけに止める。この比較に関しては、Miquel [1967: 285-92] やal-Ja'fari [1980: 248-57] による論及があるが、ヤックビーとBlkh学派の類似点は、自らの旅行による観察に基づいた記述を重視すること、イスラーム圏に記述を限定すること、総合的な内容の地誌を心掛けることが挙げられる。すなわち、これらが「諸道と諸国」の目指すものと言えよう。また、地方史の主要点への言及を地域描写に取り入れていることも類似点として挙げられる。

他方、両者の相違点は第1に、Blkh学派はal-'IrāqとBaghdādではなく、Diyār (あるいはJazīrat) al-'Arab (アラビア半島)、Makkahを中心に据え、4方位別記述ではなく、地勢や行政に基づく地方を記述の単位にした点である。政治的分裂状態にあった当時のイスラーム世界に対する一種の理想的な枠組みを提供する試みともとれる [竹田 1997: 78]。第2に、Blkh学派は行政地理書を凌駕する、Miquel [1967: 269 ff.] が「人間地理」と命名したイスラーム圏地誌を生み出した点である。そして、両者共に自らの旅行による観察に基づくとは言え、Miquelのすぐれた論及の言葉を借りれば、ヤックビーは「旅行記の類と変わらぬ一本調子の叙述展開」をしており、Mqdのような「記述の核となるテーマを中心にして秩序正しく並置された一つ一つの要素によって大地を描写していく方法」に至っておらず、ヤックビーは「マサーリク（「諸道と諸国」のこと）というジャンルが最終的に立脚することになる、冒険として体験される旅行と地理学的分類に資する旅行との本質的な識別を行っていない。マサーリクの著者たちはヤックビー同様にこの旅行を十分に体験し、またヤックビー同様にこの旅行を巧みに利用して、彼等自身の情報を得ているあるいはその情報を証拠立てている。しかし、彼らは世界を理路整然と呈示すべき時が来たなら、この旅行にとって代え、外部から強いられる論理的で首尾一貫した原理を持ってくるのである」

11) Blachère [1957: 112] やMiquel [1967: 268, 286] はYbを「諸道と諸国」というジャンルのパイオニア、Mu'nis [1967: 8] はYbを「国々の学」の真の創始者とみなしている。

[以上, 291-92]。すなわち, Blkh 学派は論理的で極めて体系的な地誌を目指したのである。最後に, IKhrr との比較でも見られたが, ヤクロービーは他の「諸道と諸国」の著者たちと比べて, 歴史とのつながりが強い。

### III

次に, 後世のアラビア語作品に見られるヤクロービーの書からの引用・利用を取り上げる。これは彼の地理書の具体的な影響であり, この書の価値を明示する好例である。

ヤクロービーの現在知られている『国々』の範囲内では, Iṣḥāq b. al-Ḥusayn (344 AH/955 年以後没) の *K. Ākām al-Marjān fi Dhikr al-Madā'in al-Mashhūrah fi Kull Makān* や {Yaqūt (626 AH/1229 年没) の *K. Mu'jam al-Buldān*}, Abū 'l-Fidā' (732 AH/1331 年没) の *K. Taqwīm al-Buldān*, al-Ḥimyari (900 AH/1494 年没) の *K. ar-Rawḍ al-Mi'ār fi Khabar al-Aqtār* などのいわば地名辞典をはじめ, Ibn Shaddād (684 AH/1285 年没) の *K. al-A'lāq al-Khaṭīrah fi Dhikr Umarā' ash-Sha'm wa-'l-Jazīrah* や al-Maqrīzī (845 AH/1442 年没) の *K. al-Mawā'iz wa-'l-I'tibār fi Dhikr al-Khiṭaṭ wa-'l-Āthār* といった地歴書, Abū 'l-Fidā' などを多用する al-Qalqashandī (821 AH/1418 年没) の *K. Ṣubḥ al-A'shā fi Ṣinā'at al-Inshā'* という百科書, 更には, ash-Sharīshī (620 AH/1222 年没) の *K. Sharḥ Maqāmāt al-Ḥarīri al-Baṣri* というマカーマート解説書などに, al-Ya'qūbī (別名, Aḥmad b. <Abi> Ya'qūb <al-Kātib>, Ibn Abī Ya'qūb, Ibn Waḍīḥ ほか) からの引用・利用が多く見られ<sup>12)</sup>, それらは Baghdād をはじめ, al-Jibāl の as-Sīrawān, Khurāsān の Naysābūr・Balkh, al-'Irāq の al-Kūfah・Wāsiṭ などを中心に, 東は {Mā Warā' an-Nahr} Khujandah から西は al-Maghrib までヤクロービーの記述のほぼ全域に及ぶ<sup>13)</sup>。

12) 但し, Iṣḥāq b. al-Ḥusayn は Yb からの引用とは明言していない。その他, al-Khaṭīb al-Baghdādī (463/1070 年没) の *K. Ta'rikh Baghdād*, al-Qazwīnī (682/1283 年没) の *K. Āthār al-Bilād wa-Akhhbār al-'Ibād*, ad-Dimashqī (727/1327 年没) の *K. Nukhbat ad-Dahr fi 'Ajā'ib al-Barr wa-'l-Baḥr* にも Yb からの引用があり, 更には, al-Bakrī (487/1094 年没) の *K. al-Masālik wa-'l-Mamālik* と *K. Mu'jam Mā Ista'jam min Asmā' al-Bilād wa-'l-Mawāḍi'* も Yb のこの書を利用した可能性がある。

13) al-'Irāq と ash-Shām や Miṣr との比較 [AF: 225-26 YbB: 236]・Miṣr との比較 [QI: III, 282 YbB: 236], Baghdād [IbḤ: 33-34 YbB: 241] [KhB: I, 66, 67, 69 YbB: 238, 254] [D: 186 YbB: 250] [Ḥ: 110-12 YbB: 233-35 237-38 238-39 245 246 250-51 254], Surra Man Ra'ā [IbḤ: 36-37 YbB: 255-56, 58-59, 63-65], as-Sīrawān [AF: 415 YbB: 269] [QI: IV, 367 YbB: 269] Shirawān [Ḥ: 351 YbB: 269], aṣ-Ṣaymarah [AF: 413 YbB: 269] [QI: IV, 368 YbB: 269], Ḥulwān [IbḤ: 68 YbB: 270], Qazwīn [AF: 419 YbB: 271], Hamadhān [IbḤ: 65 YbB: 272], Nihāwand [IbḤ: 65 YbB: 272], Qumm—Hamadhān [AF: 417 YbB: 273], Iṣbahān [IbḤ: 66 YbB: 274-75], ar-Rayy [IbḤ: 67 YbB: 275-76], Qūmis [AF: 432 YbB: 276] [QI: IV, 388 YbB: 276], Āmul [AF: 435 YbB: 276] [QI: IV, 385 YbB: 276], ↗

また、本来の書にはあったのではないかと考えられる部分に関しては、すでに de Goeje によるフラグメント [YbB: 361-73] がある。しかし、そこで扱われていない作品にもヤクロービーの引用が見られ、かつ de Goeje が集めたものの一部は『国々』とは別作品ではないかと思われるので、改めて、後世の書に記されたヤクロービーの『国々』からの引用・利用と考えられる部分を少し検討してみる。

まず、Ibn Shaddād の前掲書には、Ibn Abi Ya'qūb の *Kitāb al-Buldān* と明記した引用が、Nāḥiyat al-'Amq — Ḥalab あるいは Qinnasrīn の属地 — [ISha (A): I, 306] と、Kaysūm — al-'Awāṣim (シリア最北部) の一部 — [ISha (A): II, 442] に見られるのをはじめ、前記の現『国々』からの引用の際と同じ表現 (① Ibn Abi Ya'qūb, あるいは ② Ibn Wāḍiḥ が言った) による引用が、Bālis — al-Furāt (ユーフラテス川) 岸の ash-Shām の都市 — [ISha (A): II, 14], al-Maṣṣīṣah [ISha (A): II, 144-45], Adh-anah [ISha (A): II, 151], 'Ayn Zarbah — ath-Thughūr ash-Shāmīyah (シリア北辺境部) の都市 — [ISha (A): II, 156], al-Hārūniyah — ath-Thughūr ash-Shāmīyah の都市 — [ISha (A): II, 158], Malaṭīyah [ISha (A): II, 184-85], Anṭākiyah [ISha (A): II, 371], Ra'bān と Dulūk — 共に al-'Awāṣim の地区 — [ISha (A): II, 435], Manbij [ISha (A): II, 447-48] <以上①>, 第 2 Qinnasrīn の Ḥiyār Banī al-

↘ Ṭabaristān [IbH: 69 YbB: 277], Jurjān [IbH: 70 YbB: 277], Ṭūs [IbH: 73 YbB: 277] [AF: 443 YbB: 277], Naysābūr [IbH: 72 YbB: 278] [AF: 451 YbB: 278-79] [Ql: IV, 390 YbB: 278-79], Marw [IbH: 74-75 YbB: 279], aṭ-Ṭāliqān [AF: 421 YbB: 287] [Ql: IV, 371 YbB: 287], Balkh {[Sh: IV, 4 YbB: 287-88]} [AF: 461 YbB: 287-88], Usrūshanah [AF: 497 YbB: 293-94] [Ql: IV, 433 YbB: 293-94], Kāshān (Kāsān) [AF: 501 YbB: 294], ash-Shāsh [AF: 495 YbB: 294], Khujandah [AF: 499 YbB: 294] [Ql: IV, 437 YbB: 294], al-Kūfah [IbH: 38 YbB: 309] [Sh: I, 93 YbB: 309], Makkah [IbH: 27 YbB: 315], Wāsiṭ [Sh: III, 91 YbB: 322] [AF: 307 YbB: 322] [Ql: IV, 335 YbB: 322], Ḥimṣ [Sh: IV, 180 YbB: 324], Salamīyah [AF: 265 YbB: 324] [Ql: IV, 114 YbB: 324], Dimashq [Sh: II, 3 YbB: 325], Jabal Sinīr [ISha (B): 38 YbB: 326], Jabal al-Jalīl [ISha (B): 37 YbB: 327], Ṣaydā [ISha (B): 37 YbB: 327], Jund al-Urdunn [ISha (B): 123 YbB: 327], Ṭabariyah [H: 385 YbB: 327], al-Faramā [M: I, 211 YbB: 330], al-Fuṣṭāṭ [H: 441 YbB: 330], al-Fayyūm [M: I, 247 YbB: 331], al-Ushmūnayn (Yb では Asyūṭ) [M: I, 239 YbB: 331], Kharibat al-Malik [Yt: II, 417 YbB: 333] [Qz: 125 YbB: 333], Tinnīs [Sh: IV, 85 YbB: 337], Dimyāṭ [Sh: I, 78 YbB: 338], al-Qulzum [M: I, 213 YbB: 340], al-Maghrib の Qamūdah と Subayṭilah [H: 302 YbB: 349], その他、利用としては, Baghdād [BMa: I, 434-35, 436 YbB: 237-38, 254], al-Kūfah [BMa: I, 428 H: 106 YbB: 309], al-Ḥīrah [BMu: I, 18 cf. YbB: 309], al-Baṣrah [IbH: 39 YbB: 323], Dimashq [IbH: 57 YbB: 325], Dimashq 軍管区 [ISha (B): 41 YbB: 326], 'Asqalān [IbH: 61 YbB: 329] や, Al-Farrā [1981: 41] によれば, Miṣr からの巡礼道上の 'Ajrūd や Aylah [Yt: I, 422-23 YbB: 340], al-Maghrib の Tāhart [Yt: I, 814 cf. YbB: 353] も考えられる。また, Al-Wohaibi [1973: 417] に従えば, 北ヒジャーズ巡礼道の記述が al-Muhallabī (380/990 年没) の半ば不明の地理書 (*K. al-Masālik wa-l-Mamālik*) に利用されたらしい。

Qa'qā' [ISha (A): II, 38, 41], Qinnasrīn すなわち第1 Qinnasrīn [ISha (A): II, 41], Martaḥwān と Ma'arrat Maṣrīn —— 共に Qinnasrīn 軍管区の地区 —— [ISha (A): II, 52] 〈以上②〉に見られる。これらの殆どは、Ibn Shaddād のこの作品に大きく基づく Ibn ash-Shiḥnah (890 AH/1485 年没) の歴史書 *K. Nuzhat an-Nawāzīr fī Rawḍ al-Manāzīr* (?) にも見られる<sup>14)</sup>。

そして、ash-Sharīshī, Abū 'l-Fidā', al-Ḥimyarī の各前掲書にも、上述の『国々』の際と同じ表現 (③ al-Ya'qūbī, ④ Aḥmad al-Kātib, ⑤ Aḥmad b. Abī Ya'qūb が言った) の引用が, Naṣībīn [Sh: II, 140] や Malaṭīyah [Sh: III, 211] 〈以上③〉, Kūrat al-Ḥiyār (=Ḥiyār Banī al-Qa'qā') [AF: 232] と Adhanah [AF: 249] と Maṣṣīṣah [AF: 251] と Bāb Skandarūnah —— Anṭākiyah の近くの海岸都市 —— [AF: 255] 〈以上④〉, Armīniyah [AF: 387] 〈⑤〉, al-Ḥadīthah —— al-Mawṣil (モスル) の1地区の都市 —— [H: 189-90] やその周辺 of 'Ānāt と Alūsah と an-Nāwūsah [H: 405] 〈以上③〉に見られる。更には、de Goeje [YbB: 361-62, 363-64] も挙げる、Tiflīs ほか Armīniyah [Sh: III, 172] と Shirāz [Sh: III, 198] も、ヤクアービーの名は明記していないが、おそらく彼の『国々』からの引用と考えられる。

その他、al-Qalqashandī の前掲書には、Aḥmad b. Ya'qūb al-Kātib が *al-Masālik wa-'l-Mamālik* の中で言ったとする —— Abū 'l-Fidā' に拠ったと考えられる<sup>15)</sup> ——, Adanah の記述 [QI: IV, 134] が挙がっており、ヤクアービーの *al-Masālik wa-'l-Mamālik* が『国々』の別名とするならば、al-Idrīsī (560 AH/1165 年没) の地理書 *K. Nuzhat al-Mushtāq fī Ikhtirāq al-Āfāq* 中の、*Kitāb al-Masālik* 〈*wa-'l-Mamālik*〉の著者 Aḥmad b. 〈Abī〉 Ya'qūb が語ったあるいは伝えたとする、al-Baṣrah のモスクの記述 [Id: 383], Nahr Tīrā —— Madīnat al-Ahwāz から1日行程 —— の記述 [Id: 399] も、ヤクアービーの本来の『国々』の記述である可能性が高い<sup>16)</sup>。

14) Kaysūm [IShi: 221], Bālis [IShi: 160], al-Maṣṣīṣah [IShi: 177], 'Ayn Zarbah [IShi: 182], Malaṭīyah [IShi: 193], Ra'bān と Dulūk [IShi: 219], Manbij [IShi: 222] 〈以上, Ibn 〈Abī〉 Ya'qūb〉, 第2 Qinnasrīn [IShi: 164], Martaḥwān と Ma'arrat Miṣrīn [IShi: 166] 〈以上, Ibn Wāḍiḥ〉。

15) Abū 'l-Fidā' は Yb の『国々』からの引用 [AF: 226 YbB: 236] の際に、「al-Masālik と al-Mamālik に関する Aḥmad b. Abī Ya'qūb al-Kātib の書に拠る」と記している。

16) この al-Baṣrah の記述は Ibn al-Wardī (861/1457 年没) の *K. Kharīdat al-'Ajā'ib wa-Farīdat al-Gharā'ib* にも Aḥmad b. Ya'qūb が語ったとして同様なものが挙がっている [IW: 57]。また、de Goeje のフラグメント [YbB: 361] には、al-Waṭwāṭ (718/1318 年没) の *K. Mabāḥij al-Fikr wa-Manāḥij al-'Ibar* 中の、Ibn Abī Ya'qūb が述べたとする、Nahr al-Ahwāz の記述 (cod. Robertson Smith f. 94 v.) が挙がっている。その他、Ibn al-Faqīh (290/903 年以後没) の *K. al-Buldān* は、Aḥmad b. Wāḍiḥ al-Iṣbahānī が語ったとして Armīniyah の記述 [IF: 586] を挙げ、Yāqūt の前掲書も Ibn al-Faqīh を通してだが、Ibn Wāḍiḥ al-



このように、おそらくは al-Baṣrah 以下, Ahwāz [Nahr Tirā], Fāris [Shirāz] などの東南部や, al-Jazīrah (上メソポタミア) [al-Ḥadithah ほか] から, ash-Sha'm の al-'Awāṣim·ath-Thughūr [al-Maṣṣīṣah, Adhanah, Malaṭiyah ほか], Armīniyah [Tiflis ほか] といった西北部の記述に及んでおり、少なくともこれらは、本来の『国々』の本論後半の第3・4部に含まれていたと考えてもよいのではなからうか。

#### IV

最後に、西欧的用法のいわゆる近現代におけるこの書の利用に言及する。

まず、翻訳としては、Wiet [1937] によるフランス語全訳や, Āyatī [1964] によるペルシア語全訳のほか, de Goeje [1860] によるマグリブ部分のラテン語訳, Gildemeister [1881] によるパレスティナ部分のドイツ語訳, Youssouf Kamal [1930] による全アフリカ部分のフランス語訳, Kubbel & Matveev [1960] による非アラブのアフリカ部分(エジプトとマグリブとの両外縁部)のロシア語訳, Hopkins [1981] によるマグリブの外縁部分の英語訳などがある。

次に、この地理書の内容全体に言及しているのは、前述の Wiet [1937], Krachkovskiy [1957], Miquel [1967], al-Ja'fari [1980], Al-Farrā [1981], Hopkins [1990], Sturm [1994] のほか、主なものだけでも, Devic [1882], Goldziher [1908 (1966)], Blachère [1932 (1957)], Nafis Ahmad [1947], Pellat [1952], Ziyādah [1962], Alavi [1965], Ḥamīdah [1969], Khuṣbāk [1986], Maqbul Ahmad [1995] など、概してアラビア語地理文学を扱った研究が多い。この書の価値をあまり認めなかった Devic を除いては、いずれもこの書にほぼ高い評価を下している。

そして、歴史地理などの主に史料としての利用に目を向けると、ヤクロービーによる Baḡhdād の khiṭaṭ は Le Strange [1900] と Streck [1900] 以来, Herzfeld [1920], Jawād & Sūṣah [1958], al-'Amīd [1967], al-'Alī [1967, 1985]·El-'Alī [1970], Lassner [1970 b, 1980] ほかや、ヤクロービーとほぼ同時代の al-Khaṭīb al-Baḡhdādī を扱った Salmon [1904] や Lassner [1970a] などにもよく利用されている。同様に, Surra Man Ra'a (Sāmarrā') の khiṭaṭ に関する記述も Streck [1901], Schwarz [1909], Herzfeld [1948],

↘ Iṣbahānī が語ったとする同じ記述 [Yt: I, 222] を挙げている。この Aḥmad b. Wāḍiḥ al-Iṣbahānī は de Goeje などが考えるように Yb と同一人物である可能性が高い。最後に, de Goeje のフラグメント [YbB: 364-70] に挙がっている Muḥammad b. Aḥmad at-Tamīmī (380/990 年頃没) の *K. Jayb al-'Arūs wa-Rayḥān an-Nufūs* ならびにそれを引用した an-Nuwayrī (732/1332 年没) の *K. Nihāyat al-'Arab fī Funūn al-'Adab* に見られる, Aḥmad b. Abī Ya'qūb が言ったとする麝香・竜涎香・沈香・甘松香・丁子ほか香料に関する記述は、『国々』の内容ではない可能性が高い。

Rogers [1970], al-‘Amīd [1974, 1976], al-A‘zamī [1982], ‘Abd al-Bāqī [1989], North-edge [1993], Lassner [2000] ほかにしばしば用いられている。加えて, al-Kūfahの khiṭaṭの記述も Massignon [1935], al-‘Alī [1965, 1974], al-Janābī [1967], Djaīt [1986] などに利用されている<sup>17)</sup>。

また, イラク以東全域の記述は Le Strange [1905], イランだけの記述は Marquart [1901], 中央アジアの記述は Barthold [1928], スィースターンとホラーサーンとの総督史などの記述は Bosworth [1968], といったよく知られた研究書に利用されている。他方, シリア・パレスティナの記述は Le Strange [1890], ‘Aṭwān [1987], ‘Arrāf [1992] ほか, アラビア半島の記述は Musil [1926, 1928], Kaḥḥālah [1944], Al-Wohaibi [1973] など, エジプトの記述は Reitemeyer [1903], Maspero & Wiet [1914-19], ash-Shāmī [1973] ほかに利用されている。更には, エジプトとマグリブとの両外縁部の記述は Marquart [1913], エジプトの外縁部の記述は Mekouria [1988], マグリブの外縁部の記述は Lewicki [1962, 1988], Levtzion [1968], そしてマグリブの記述は, Marçais [1941, 1946] をはじめ, Lewicki [1957], Laroui [1970] ほかに利用されてきた。

その他, 古くは ar-Rūs (実はノルマン人) の Ishbīliyah (セビリア) 侵攻の記述 [YbB: 354] が Frāhn [1838] や Garkavi [1870] などに, また, 全体にわたっては, Mez [1922], Miquel [1975-88], Shaban [1976] などのすぐれた研究にも利用されている。

## おわりに

ヤックービーを引用・利用した文献はほかにも多数あるが, 以上だけでも彼の『国々』がいかなる価値を持っているのかは十分に察することができよう。この書はイスラーム帝国の両首都の khiṭaṭの描写および帝国各地とその道程との記述からなるが, IKhrの行政地理書を継承すると共に, 本格的な地誌のはじまりとして, 「諸道と諸国」の先鞭をつけた作品である。そして, その Baghdādをはじめとする記述が少なくとも西暦15世紀まで地名辞典を中心にアラビア語文献作品に引用・利用され続けた。

また, ヤックービーの『国々』は近現代における研究者たちにとっても多くの場合, 第一次資料として重宝されてきた。この地理書に焦点を当てた研究自体は少ないが, アラビア語地理文学を扱った研究ではこの『国々』が必ず言及される。そして, この書に見られる貴重な記述, 特に al-Manṣūr・al-Mahdi時代の Baghdād や al-Mu‘taṣīm時代ほかの Surra Man Ra‘ā, ファーティマ朝勃興前夜の al-Maghrib とその外縁部に関する記述などを利用し

17) そのほか, al-Madā‘inの記述が Fiey 1967 や al-‘Alī 1967, Wasiṭの記述が al-‘Alī 1970・1971 に利用されている。

た研究は多数にのぼる。

9世紀後半までの東は Isbijāb から西は as-Sūs al-Aqṣā に及ぶ各地の様々な情報を含むヤクービーの『国々』は、ほぼ利用し尽くされた感がするかも知れない。しかしながら、都市の住民構成、飲料水源、物産などは、まだ十分に活用されているとは言い難い。とりわけ、住民構成に関する記述には、諸民族の共存状況——例えば、al-Jibāl 地方の aṣ-Ṣaymarah や Ḥulwān の住民はアラブ人とペルシア人とクルド人 [共に YbB: 270], al-Maghrib 地方の Ṭubnah の住民はアラブ人とペルシア人とアフリカ人（ラテン系）と東ローマ人（ギリシア人）とベルベル人 [YbB: 350] —— や、80 以上の名が挙がるアラブ諸部族・氏族の居住地の分布——例えば、南アラブ系の al-Azd 族は東は Marw [YbB: 279], 西は Barqah [YbB: 343], 北アラブ系の Qays ‘Aylān 族は東は Iṣbahān [YbB: 275], 西は al-Andalus の al-Birah [YbB: 354] まで——など、今後まだ利用すべき部分がかかり見受けられる<sup>18)</sup>。

更に、Ibn Shaddād, Abū ‘l-Fidā’ ほかを活用して、シリア北部などの欠落部分を復原する作業も今後の課題として残っている。

〔脱稿後、ヤクービーの『国々』に新たな版が出た (ed. Muḥammad Amin aḍ-Ḍannāwī. Bayrūt, 2002, 224 pp.) が、これも de Goeje 版の焼き直しである。〕

## 参 考 文 献

- YbB: *Kitāb al-Boldān, auctore Ahmed ibn abi Jakūb ibn Wādhīh al-Kātib al-Jakūbī*, ed. M. J. de Goeje. *Bibliotheca Geographorum Arabicorum*, vol. VII, Leiden, 1892, 231–373.
- Juynboll 版: *Specimen e literis orientalibus, exhibens Kitābo ‘l-boldān, sive librum regionum, auctore Ahmed ibn Abi Ja‘qūb, noto nomine al-Jaqūbī*, ed. A. W. Th. Juynboll. Leiden, 1861, 154 pp.
- Najaf 版①: *Kitāb al-Buldān, ta‘lif Aḥmad b. Abi Ya‘qūb b. Wādhīh al-Kātib*. an-Najaf, 1939, 132 pp.
- Najaf 版②: *Kitāb al-Buldān, ta‘lif Aḥmad b. Abi Ya‘qūb b. Wādhīh al-Kātib*, ed. Muḥammad Ṣādiq Āl Baḥr al-‘Ulūm. an-Najaf, 1952, 132 pp.
- Beirut 版: *Kitāb al-Buldān, ta‘lif Aḥmad b. Abi Ya‘qūb b. Wādhīh al-Kātib*. Bayrūt, 1988, 158 pp.
- AF: Abū ‘l-Fidā’. *Kitāb Taqwīm al-Buldān*, ed. M. Reinaud & M. G. de Slane. Paris, 1840.
- BMa: al-Bakrī. *Kitāb al-Masālik wa-‘l-Mamālik*, ed. A. P. van Leeuwen & A. Ferre, vol. I.

18) これまでに Yb の記述を十分に利用した研究は、Morony 1984 の al-Kūfah のアラブ部族を扱った部分 [239–45] など、きわめて少数である。

- Tūnis, 1992.
- BMu : al-Bakrī. *Kitāb Mu'jam Mā Ista'jam*, ed. F. Wüstenfeld, vol. I. Göttingen, 1876.
- D : ad-Dimashqī. *Kitāb Nukhbat ad-Dahr fi 'Ajā'ib al-Barr wa-'l-Baḥr*, ed. A. Mehren. Leipzig, 1923.
- Ḥ : al-Ḥimyarī. *Kitāb ar-Rawḍ al-Mi'tār fi Khabar al-Aqtār*, ed. Iḥsān 'Abbās. Bayrūt, 1975.
- IbḤ : Iḥṣāq b. al-Ḥusayn. *Ākām al-Marjān fi Dhikr al-Madā'in al-Mashhūrah fi Kull Makān*, ed. Fahmī Sa'd. Bayrūt, 1408/1988.
- Id : al-Idrisī. *Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fi Ikhtirāq al-Āfāq*, ed. A. Bombaci *et al.*, fasc. IV. Napoli & Roma, 1974.
- IF : Ibn al-Faqīh. *Kitāb al-Buldān*, ed. Yūsuf al-Hādī. Bayrūt, 1416/1996.
- ISha (A) : Ibn Shaddād. *al-A'lāq al-Khaṭīrah fi Dhikr Umarā' ash-Shām wa-'l-Jazīrah*, ed. Yaḥyā Zakariyā 'Abbārah, part I, vol. I–II. Dimashq, 1991.
- ISha (B) : Ibn Shaddād. *al-A'lāq al-Khaṭīrah fi Dhikr Umarā' ash-Shām wa-'l-Jazīrah, Tārikh Lubnān wa-'l-Urdunn wa-Filastīn*, ed. Sāmī ad-Dahhān. Dimashq, 1382/1963.
- IShi : Ibn ash-Shiḥnah. *Ta'rikh Ḥalab (min K. Nuzhat al-Nawāzīr fi Rawḍ al-Manāzīr)*, ed. Keiko Ohta. Tokyo, 1990.
- IW : Ibn al-Wardī. *Kharīdat al-'Ajā'ib wa-Farīdat al-Gharā'ib*, ed. Maḥmūd Fākhūrī. Bayrūt & Ḥalab, 1411/1991.
- KhB : al-Khaṭīb al-Baghdādī. *Ta'rikh Baghdād*, vol. I. al-Qāhirah & Baghdād, 1349/1931.
- M : al-Maqrīzī. *Kitāb al-Mawā'iz wa-'l-I'tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wa-'l-Āthār*, vol. I. al-Qāhirah (Būlāq), 1270/1854.
- QI : al-Qalqashandī. *K. Ṣubḥ al-A'shā fi Ṣinā'at al-Inshā'*, vol. III–IV. al-Qāhirah, 1963.
- Qz : al-Qazwīnī. *Kitāb Āthār al-Bilād wa-Akhhbār al-'Ibād*, ed. F. Wüstenfeld. Göttingen, 1848.
- Sh : ash-Sharīshī. *Sharḥ Maqāmāt al-Ḥarīri al-Baṣrī*, ed. Muḥammad 'Abd al-Mun'im Kha-fāji, vol. I–IV. al-Qāhirah, 1372/1952.
- Yt : Yāqūt. *Kitāb Mu'jam al-Buldān*, ed. F. Wüstenfeld, vol. I–II. Leipzig, 1866–67.
- 'Abd al-Bāqī, Aḥmad (1989) *Sāmarrā: 'Āṣimat ad-Dawlah al-'Arabīyah fi 'Ahd al-'Abbāsiyyīn*, I–II. Baghdād.
- Alavi, S. M. Ziauddin (1965) *Arab Geography in the Ninth and Tenth Centuries*. Aligarh.
- al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1965) *Minṭaqat al-Kūfah. Sūmir* (Baghdād) 21 (1–2), 229–53.
- al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1967) *al-Madā'in fi 'l-Maṣādir al-'Arabīyah. Sūmir* 23, 47–65.
- El-'Alī, S. A. (1970) *The Foundation of Baghdad*. In : Hourani, A. H. & S. M. Stern (eds.) *The Islamic City*. Oxford, 87–101.
- al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1970 • 1971) *Minṭaqat Wāsiṭ, Dirāsāt Ṭubughrāfiyah Mustanidah ilā 'l-Maṣādir al-Adabīyah. Sūmir* 26, 237–62; 27; 153–83.
- al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1974) *Maṣādir Dirāsāt Tārikh al-Kūfah fi 'l-Qurūn al-Islāmiyah al-*

- Ūlā. *Majallat al-Majma' al-Ilmi al-'Irāqī* 24, 137–71.
- al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1985) *Baghdād Madīnat as-Salām: Inshā'uhā wa-Tanzīm Sukkānihā fī 'l-Uhūd al-'Abbāsiyah al-Ūlā*, I–II. Baghdād.
- al-'Amīd Ṭāhir Muẓaffar (1967) *Baghdād Madīnat al-Mansūr al-Mudawwarah*. an-Najaf.
- al-'Amīd Ṭāhir Muẓaffar (1974) Mawqī' Sāmarrā' wa-Taḥrīyāt al-Mu'taṣim. *Sūmir* 30, 171–202.
- {al-'Amīd} Ṭāhir Muẓaffar (1976) 'Imārat Sāmarrā' al-'Abbāsiyah fī 'Ahd al-Mutawakkil. *Sūmir* 32, 191–235.
- 'Arrāf, Shukrī (1992) *Jundā Filastīn wa-'l-Urdunn fī 'l-Adab al-Juḡhrāfī al-Islāmī*. Kafr Qar'.
- al-Ash'ab, Khālīṣ (1988) *al-Ya'qūbī*. Baghdād.
- 'Aṭwān, Ḥusayn (1987) *al-Juḡhrāfiyah at-Tārikhīyah li-Bilād ash-Shām fī 'l-'Aṣr al-Umawī*. Bayrūt.
- Āyatī, Muḥammad Ibrāhīm (tr.) (1964) *al-Buldān, ta'līf-i Aḥmad bin-i Abī Ya'qūb*. Tihrān, 1343.
- al-Aẓamī, Khālīd Khalīl (1982) Qaṣr al-Khalifah al-Mu'taṣim fī Sāmarrā'. *Sūmir* 38, 168–205.
- Barthold, V. V. (1928) *Turkestan down to the Mongol Invasion*, tr. H. A. R. Gibb. London.
- Barthold, V. V. (1930 [1937]) [V. V. Barthold's Preface, tr. V. Minorsky. In: Minorsky, V. (ed.) *Ḥudūd al-'Ālam*. London, 1937, 3–44]
- Blachère, R. (1932 [1957]) *Extraits des principaux géographes arabes du Moyen Age*. Paris & Beyrouth, 1932 [2<sup>nd</sup>. ed. Blachère & H. Darmaun, Paris, 1957].
- Bosworth, C. E. (1968) *Sistān under the Arabs, from the Islamic Conquest to the Rise of the Saffārids (30–250/651–864)*. Rome.
- Canard, M. (1951) *Histoire de la dynastie des H'amdānides de Jazīra et de Syrie*, I. Alger.
- Devic, L. M. (1882) Coup d'œil sur la littérature géographique arabe au moyen age. *Bulletin de la Société Languedocienne de Géographie* (Montpellier) 5 (3), 366–400.
- Djaīt, H. (1986) *Al-Kūfa Naissance de la ville islamique*. Paris.
- Al-Farrā, M. 'A. (1981) A critical edition of Kitāb al-Buldān by Al-Ya'qūbī. Ph. D. Thesis, University of Exeter.
- al-Farrā, Maḍyūf 'Abd al-Mālik (1984?) *al-Ya'qūbī*. ad-Dawḥah.
- Fiey, J. M. (1967) Topography of Al-Mada'in. *Sumer* (Baghdad) 23, 3–38.
- Frähn, Ch. M. (1838) Ein neuer Beleg, daß die Gründer des russischen Staates Nordmannen waren, und zugleich Aufklärung über den bisher fast gar nicht gekannten arabischen Reisenden, aus dessen Werke dieser Beleg entnommen. *Bulletin scientifique publié par l'Académie Impériale des Sciences de Saint-Petersbourg* 4, 131–47.
- Garkavi, A. (1870) *Skazania musulmanskikh pisatelei o slavianax i russkikh*. St.-Petersburg.
- Gildemeister, J. (1881) Beiträge zur Palästina-kunde aus arabischen Quellen. I. Ja'qūbī. *Zeitschrift des Deutschen Palaestina-Vereins* (Leipzig) 4, 85–92.

- de Goeje, M. J. (1860) *Specimen e literis orientalibus, exhibens descriptionem al-Maghribi, sumtam e libro regionum al-Jaubii*. Leiden.
- Goldziher I. (1908 [1966]) *Az arab irodalom rövid története* [A Short History of Classical Arabic Literature, tr. J. DeSomogyi. Hildesheim, 1966].
- Ḥamidah, 'Abd ar-Raḥmān (1969) *A'lām al-Jughrāfiyin al-'Arab wa-Muqatafāt min Āthārihim*. Dimashq.
- Herzfeld, E. (1920) Baghdad. In: Sarre, F. & E. Herzfeld (eds.) *Archäologische Reise im Euphrat- und Tigris-Gebiet*, II. Berlin.
- Herzfeld, E. (1948) *Geschichte der Stadt Samarra*. Hamburg.
- Hopkins, J. F. P. (1981) *Corpus of early Arabic sources for West African history*, ed. N. Levtzion & J. F. P. Hopkins. Cambridge.
- Hopkins, J. F. P. (1990) Geographical and navigational literature. In: Young, M. J. L. et al. (eds.) *Religion, learning and science in the 'Abbasid period*. Cambridge, 301–27.
- al-Ja'farī, Yāsīn Ibrāhīm (1980) *al-Ya'qūbi al-Mu'arrikh wa-l-Jughrāfi*. Baghdād.
- al-Janābī, Kāzīm (1967) *Takhḥiṭ Madīnat al-Kūfah*. Baghdād.
- Jawād, Muṣṭafā & Aḥmad Sūsah (1958) *Dalīl Khāriṭat Baghdād al-Mufaṣṣal fī Khīṭat Baghdād Qadīman wa-Ḥadīthan*. Baghdād.
- Kaḥḥālah, 'Umar Riḍā (1944) *Jughrāfiyat Shibh Jazīrat al-'Arab*. Dimashq.
- Khuṣṣāk, Shākīr (1986) *al-Jughrāfiyah 'inda l-'Arab*. Bayrūt.
- Krachkovskiy, I. Y. (1957) *Arabskaya geograficheskaya literature (Izbrannyye sochineniya, IV)*. Moskva & Leningrad.
- Kramers, J. H. (1954) *Analecta Orientalia*, I. Leiden.
- Kubbel, L. E. & V. V. Matveev (1960) *Arabskie istochniki VII–X vekov*. Moskva & Leningrad.
- Lapidus, I. M. (1969) Muslim Cities and Islamic Societies. In: id. (ed.) *Middle Eastern Cities*. Berkeley, 47–79.
- Laroui, A. (1970) *L'Histoire du Maghreb: Un essai de synthèse*. Paris.
- Lassner, J. (1970 a) *The Topography of Baghdad in the Early Middle Ages*. Detroit.
- Lassner, J. (1970 b) The Caliph's Personal Domain: The City Plan of Baghdad Re-Examined. In: Hourani, A. H. & S. M. Stern (eds.) *The Islamic City*. Oxford, 103–18.
- Lassner, J. (1980) *The Shaping of 'Abbasid Rule*. Princeton.
- Lassner, J. (2000) *The Middle East Remembered*. Ann Arbor.
- Le Strange, G. (1890) *Palestine under the Moslems*. London.
- Le Strange, G. (1900) *Baghdad during the Abbasid Caliphate*. Oxford.
- Le Strange, G. (1905) *The Lands of the Eastern Caliphate*. Cambridge.
- Levtzion, N. (1968) Ibn Ḥawqal, the cheque and Awdaghost. *Journal of African History* 9, 223–33.
- Lewicki, T. (1957) La répartition géographique des groupements ibādites dans l'Afrique du

- Nord au moyen-âge. *Rocznik Orientalistyczny* 21, 301 – 343.
- Lewicki, T. (1962) L'État nord-africain de Tâhert et ses relations avec le Soudan occidental à la fin du VIII<sup>e</sup> et au IX<sup>e</sup> siècle. *Cahiers d'études africaines* 2 (8), 513 – 33.
- Lewicki, T. (1988) The role of the Sahara and Saharians in relationships between north and south. In: El Fasi, M. (ed.) *Unesco General History of Africa* III. Paris, London & Berkeley, 276 – 313.
- Māl Allāh, 'Alī Muḥsin (1978) *Adab ar-Raḥalāt 'inda 'l-'Arab fi 'l-Mashriq*. Baghdād.
- Maqbul Ahmad, S. (1995) *A History of Arab-Islamic Geography*. Amman.
- Marçais, G. (1941) La Berbérie au IX<sup>e</sup> siècle d'après El-Ya'qoubī. *Revue Africaine* (Alger) 85, 40 – 61.
- Marçais, G. (1946) *La Berbérie musulmane et l'Orient au moyen âge*. Paris.
- Marquart, J. (1901) *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.
- Marquart, J. (1913) *Die Benin-Sammlung des Reichsmuseums für Völkerkunde in Leiden*. Leiden.
- Maspero, J. & G. Wiet (1914 • 1919) *Matériaux pour servir à la géographie de l'Égypte*, I – II. Le Caire.
- Massignon, L. (1940) Explication du plan de Kūfa (Irak). In: *Mélanges Maspéro*, III. Le Caire, 337 – 60.
- Mekouria, T. T. (1988) The Horn of Africa. In: El Fasi, M. (ed.) *Unesco General History of Africa* III. Paris, London & Berkeley, 558 – 74.
- Mez, A. (1922) *Die Renaissance des Islams*. Heidelberg.
- Miquel, A. (1967) *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11<sup>e</sup> siècle*, I. Paris & La Haye.
- Miquel, A. (1975 – 88) *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11<sup>e</sup> siècle*, II – IV. Paris { & La Haye}.
- Morony, M. G. (1984) *Iraq after the Muslim conquest*. Princeton.
- Mu'nis, Ḥusayn (1967) *Tārīkh al-Juḡhrāfiyah wa-'l-Juḡhrāfiyin fi 'l-Andalus*. Madrid.
- Musil, A. (1926) *The Northern Hegaz. A Topographical Itinerary*. New York.
- Musil, A. (1927) *The Middle Euphrates. A Topographical Itinerary*. New York.
- Musil, A. (1928) *Northern Negd. A Topographical Itinerary*. New York.
- Nafis Ahmad (1947) *Muslim Contribution to Geography*. Lahore.
- Northedge, A. (1993) An Interpretation of the Palace of the Caliph at Samarra (Dar al-Khilafa or Jawsaq al-Khaqani). *AOr* 23, 143 – 170.
- Pellat, Ch. (1952) *Langue et Littérature arabes*. Paris.
- Reitemeyer, E. (1903) *Beschreibung Ägyptens im Mittelalter aus den geographischen Werken der Araber*. Leipzig.
- Rogers, J. M. (1970) Sāmarrā: a Study in Medieval Town-Planning. In: Hourani, A. H. & S.

- M. Stern (eds.) *The Islamic City*. Oxford, 119–55.
- Sabari, S. (1981) *Mouvements populaires à Bagdad a l'époque 'Abbasside, IX<sup>e</sup>-XI<sup>e</sup> siècles*. Paris.
- Salmon G. (1904) *L'introduction topographique à l'histoire de Bagdādh*. Paris.
- Schwarz P. (1909) *Die 'Abbāsiden-Residenz Sāmarrā*. Leipzig.
- Shaban M. A. (1976) *Islamic History: A New Interpretation 2*. Cambridge, New York & Melbourne.
- ash-Shāmi, 'Abd al-'Āl 'Abd al-Mun'im (1973) *Miṣr 'inda 'l-Juġhrāfiyīn al-'Arab*. al-Qāhirah.
- Streck, M. (1900) *Die alte Landschaft Babylonien nach den arabischen Geographen*, I. Leiden.
- Streck, M. (1901) *Die alte Landschaft Babylonien nach den arabischen Geographen*, II. Leiden.
- Sturm D. (1994) Zur Methode al-Ya'qūbi's in seinem geographischen Werk. In: Bellmann, D. (ed.) *Gedenkschrift Wolfgang Reuschel (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, 51/1)*. Stuttgart, 287–95.
- Wiet, G. (tr.) (1937) *Ya'kūbi Les Pays*. Le Caire.
- Wiet, G. (1966) *Introduction à la Littérature Arabe*. Paris.
- Al-Wohaibi, A. (1973) *The Northern Hijaz in the Writings of the Arab Geographers 800-1150*. Beirut.
- Youssouf Kamal (1930) *Monumenta cartographica Africae et Aegypti*, III (1). Le Caire.
- Ziyādah, Naqūlā (1962) *al-Juġhrāfiyah wa-'r-Raḥalāt 'inda 'l-'Arab*. Bayrūt.
- 竹田 新 (1979) イブン=ホルダーズベの『諸道と諸国の書』『大阪外国語大学学報』43, 87–107.
- 竹田 新 (1984) ムカッダシーの『諸州の知識に関する最良の区分の書』について 『大阪外国語大学学報』64, 103–118.
- 竹田 新 (1989) ド・フーエ編纂アラビア語地理叢書のデータ・ベース化とその一利用法をめぐって 『イスラムの都市性研究報告 研究会報告編』(文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」) 7, 40–55.
- 竹田 新 (1997) アラビア語地理書の世界——ムカッダシーの世界観・地域観 辛島 昇・高山 博(編)『地域の世界史2 地域のイメージ』山川出版社, 56–92.

(大阪外国語大学外国語学部)